

保育士
幼稚園教諭
必見

子どもたちに

豊かな自然体験活動を!

～幼児期における自然体験活動の取組～

ぼくは太陽と虹を見つけたよ!



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立妙高青少年自然の家

体験の風を
おこそう



GACHAPIN × MUKKU

© FUJITSU KPS
国立青少年教育振興機構

本報告書について

本報告書は、幼児期における自然体験活動の取組を通して、子どもたちの姿や変容や、自然体験活動の意義について述べています。

- 年間を通したキャンプに参加した子どもたちの姿や変容を紹介します。
- キャンプで実践した幼児向け活動プログラムについて、指導方法等を紹介します。
- 妙高市教育委員会との協働運営について紹介します。
- 妙高市内保育園（2園）における園外保育の取組を紹介します。

これらの報告が、子どもの環境構成や園外保育の実践に役立ち、園における自然体験活動の拡充が図られれば幸いです。



もくじ

- 2 幼児期における自然体験活動の意義
- 4 幼児キャンプの実践報告
- 12 妙高市教育委員会との協働運営
- 14 幼児期にふさわしい活動プログラム紹介
 - ・森のあそび（移動型）
 - ・野外調理
 - ・テント泊
 - ・夜の活動（ナイトハイク、キャンプファイヤー、スノーキャンドル）
- 22 保育園における園外保育の取組（年間を通した自然体験活動）
 - ・妙高市立妙高保育園〔公立保育園〕
 - ・社会福祉法人ときわ保育園〔私立保育園〕
- 26 おわりに

幼児期における自然体験活動の意義

豊かな自然環境の中で、様々な体験活動を行うことは大きな意義があります。自然の中では、幼児の興味・関心に即して多くの発見があり、それを知りたいという探求心が育まれます。また、諸感覚を通して、“本物”に触れていきます。本物に触れたときの感動は活動する意欲につながります。意欲のある子どもたちは、自発的に活動し、自己の能力を十分に発揮していきます。さらに、仲間と協力をしながら遊びを発展させていきます。

このような環境で、子どもたちは「生きる力」の基礎をじっくりと育んでいきます。

確かな学力

生きる力

豊かな人間性

健康・体力

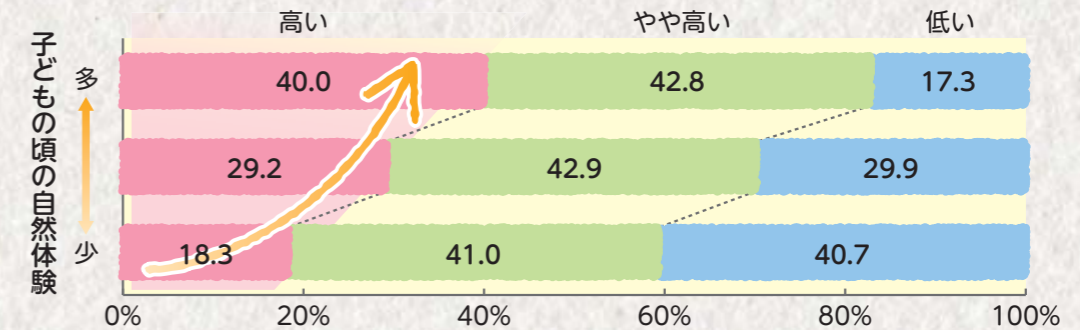


—幼児期にこそ豊かに土壌を育む要素—

- 感動
- 発見する喜び
- 興味をもつ
- もっと知りたいという探究心
- 仲間と協力する
- いろいろなことに関わる
- 夢中に遊ぶ
- ガマンする
- 出来る喜び
- 仲間と遊ぶ楽しさ
- 夢中に遊ぶ
- 汗をかく
- 挑戦する
- たくさん歩く
- など

幼児期の自然体験活動が多い

➡ 大人になって「意欲・関心」が高い



出典：独立行政法人 国立青少年教育振興機構
「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告（平成22年）

幼児期における“ほんもの教育” ～妙高市の取組～

妙高市教育委員会では、子どもたちの“ほんもの教育”に重点を置き、日々教育活動を展開しています。市内の保育園・幼稚園は自然の家に足を運び、年間を通して自然体験活動をしています。「自然の中での“感動体験”や“困難な体験”」など、様々な経験を積んでいます。バーチャルではなく“ほんもの”は、心と身体の諸感覚に直接響きます。この響きが子どもたちを成長させます。自然の中での遊びは幼児期にこそ意義があります。

このように妙高市教育委員会では、自然体験活動の意義を理解し、園の年間計画に位置づけて活動を行っています。多い園で年間10回程度、足を運んでくれます。この成果は子どもたちの自信になり揺るがない力となることでしょう。

引用：妙高市広報（平成25年4月号）

幼児キャンプ

キャンプにおける(1泊2日)プログラムデザイン

本キャンプのプログラムは1泊2日で構成されています。子どもの発達段階に即して環境(援助を含む)を設定し、幼児期における自立など社会性の素地を育むことも視野に入れてプログラムを構成しました。

幼児期にふさわしいプログラムデザインを“3つのポイント”で提案します。

POINT
1 基本的生活習慣を意識する。

幼児期に、基本的生活習慣を体得することは、発達段階的にもきわめて重要です。十分に身体を動かし遊ぶことで、食欲や睡眠欲が促されます。「良く食べ、良く遊び、良く寝る」子どもは、心身ともに健全な成長をしていきます。よって、キャンプでは朝6:00に起床し、身の回りの整理整頓を行います。トイレや歯みがきなど自分でできることは自分で行うよう、時間にゆとりをもって対応します。また、保育者の援助としては、指示ではなく自分で気が付いて出来るような言葉がけを行うようにしています。

POINT
2 子どもたちが協力して活動できる環境を意識的に設定する。

ふとんを敷いたり、一緒にお風呂に入ったり、グループで活動したりと、子ども同士で活動する場面を多く設定します。自分だけの思いは通じず、他者とのやりとりが必要です。その中で相手を思いやり、気持ちを受け止めることが活動を通して徐々にできてきます。保育者はその場面をしっかりと読み取り、子どもたちに「ありがとうね」など言葉を返してあげることが大切な援助だと思います。

POINT
3 子どもたちの“遊び込む”時間を保証する環境を設定する。

活動していて、1時間経過したので「はい、次に行きましょう」ではありません。子どもたちが“遊び込む”ことに意義があるのです。主体的に遊び、積極的に物や人と関わって、興味や関心をもってこそ遊び込めるのです。この環境を保証してあげることが重要です。

よってプログラムを企画する際、その場所で子どもたちの遊ぶ姿や、遊びがどのように発展するかを予想し、十分に場所や時間のゆとりをもつことが大切です。

このような視点をもつことで、幼児の学びや遊びが十分に保証されると考えます。ぜひ、保育園・幼稚園でのお泊まり保育にて実践してみてください。



幼児キャンププログラム概要

…主な活動

春

平成25年6月7日(金)～8日(土) 1泊2日

1 目 目	朝	昼間	お昼	夕方	夜
	列車ごっこ等 夕食			ナイトハイキング・ 親座談会 お風呂 ふとん敷き 読みきかせ	
2 目 目	ラジオ体操 朝食	森のあそび 昼食	活動のふりかえり		



キャンプのコンセプト



豊かな体験活動の提供



集団宿泊を通して社会的スキルの育成



子育て支援
親同士情報の共有



保育士・幼稚園教諭の
資質向上

夏

平成25年7月26日(金)～27日(土) 1泊2日

1 目 目	朝	昼間	お昼	夕方	夜
				ジャンケンゲーム等 夕食	キャンプファイヤー・ 親座談会 シャワー テント泊
2 目 目	ラジオ体操 朝食	源流探検 昼食	活動のふりかえり		

秋

平成25年10月18日(金)～19日(土) 1泊2日

1 目 目	朝	昼間	お昼	夕方	夜
				鬼ごっこ等 夕食	ナイトハイキング 親座談会 お風呂 ふとん敷き 読みきかせ
2 目 目	ラジオ体操 朝食	森の探検 親子野外調理 (丸鶏、焼きそば等) 焼き芋大会	活動のふりかえり		

冬

平成26年1月24日(金)～25日(土) 1泊2日

1 目 目	朝	昼間	お昼	夕方	夜
				手遊び歌等 夕食	スノーキャンドル作り 親座談会 お風呂 ふとん敷き 読みきかせ
2 目 目	親子ご対面 朝食	深雪探検 昼食 発表会 (思い出を発表)	活動のふりかえり		



キャンプストーリーを子どもたちの目線で紹介します。ぜひ、子どもたちと見てください。

みょうごうのきやんぷ



いつもドキドキ
キャンプがはじまるよ

また、おともだちにあえた
たのしいよ
うれしいよ
いっぱいいっぱい
あそぼうね!

みんなでごはん
とってもおいしいよ

みんなであそびうた



おふろのじゅんぴ
じぶんでできるもん



みんなでお風呂



パチャパチャたのしいよ



みんなでおふとんひいたよ
となりでねようね



おきがえも
じぶんでできるもん



アレっパジャマ
どこだっけ?



はみがきだっけじぶんでできるもん
はみがきこあまくておいしいよ!



おしっこだっけ
じぶんでいけるよ



ねるまえにママとキュー
ボクがんばって
ひとりでねるからね



おやすみ



おやすみ...



おはよう!

ママーなかなかいでねられたよ
すごいでしょ!



ぼくもだよー

わたしもっ

ボクだっけ



よーし

きょうもいっぱいあそぶぞ



きのぼりしたり

むしをつかまえたり



きれいなはなをみつけたよ



ともだちと、なかよくはったり



たきをのぼったり

いっぱいいっぱいともだちとあそびました

さいごはたのしかったことを
はっぴょうしました



わたしは、バナナのきにのぼりました。
のぼれてうれしかったです。

ぼくは、かわのなかをあるきながら
たいようとにじをはっけんしました。



わたしは、おともだちとケーキやさんをしました。
あかいのはいちごだよ。おいしいよ。

おとうさん・おかあさん
がんばったよ!



通年のキャンプを通した子どもたちの姿

なぜ、1泊2日で、年に4回のキャンプをするの？

基本的には、18名の子どもたちが春から冬まで、年間を通して参加しました。年間を通してキャンプを実施することと同じ子どもたちを対象としたのには、2つの理由があります。

1つは、キャンプの教育的効果が持続し、体験したことや学んだことが経験知として子どもたちにより浸透することを狙いました。昨年度も年間を通して参加した子どもと単発で参加した子どもの、遊び込む姿や発言などの違いから継続性の意義を実感しました。さらに飯田（1992）らも長年の幼少キャンプの実践及び研究でこの意義を明らかにしています。

2つめは、幼児期における社会性の変容を調査し研究する目的がありました。1泊2日の集団宿泊を4回繰り返すことで、社会性がどのように変容していくか明らかにしたいと思いました。キャンプの中で、子どもたちは自分のことを自分で行う（歯みがき、トイレ、就寝、着替えなど）ことで生活習慣の自立が促されます。また、友だちの意見を受け入れ調整したり、ルールを守ったり、しっかりと話を聞くなどの社会性を身に付けていきます。

このように年間を通してキャンプを実施してきたことは、子どもたちや保護者の成長に大きな影響を与えました。以下に5つの視点でまとめます。

- ① 子どもたちの豊かな表現力
- ② 自ら意欲的に遊ぶ力
- ③ 自分のことは自分で行う力
- ④ 社会力の向上
- ⑤ 親の意識変化（子育て支援の視点から）

① 子どもたちの豊かな表現力

最終回（1月）のキャンプで、今まで楽しかったことを絵で表現してもらいました。子どもたちは春から冬まで体験したことを、「川の水冷たかったよ」、「みんなとお菓子を食べたよ」などと、心に刻まれている風景を思い出しながら描いていました。一例を紹介します。



「隊長（赤い服）のそばにいるのは僕（緑の服）だよ！ 滝を登ったことが一番楽しかったよ！」（男児の発言）

この絵は、男児（年長）が描きました。源流探検で隊長（スタッフ）と一緒に滝を上りながら上流を目指しました。隊長のそばにいる安心感を元に自分の力で一歩ずつ、足場を確認しながら登りました。自分の足で登ったぞという意気込みや自信が伺えます。



「私とリアちゃん、ヒマナちゃん、モエちゃん、隊長といっしょだよ！ みんないっしょでうれしいな！」（女児の発言）

この絵は、女児（年中）が描きました。雪のテーブルやイスを作り、みんなでチョコレートを食べ、ケーキ屋さんごっこについて鮮明に描いています。友だちの表情も笑顔でとても温かく幸せな時間を感じているようです。嬉しさがにじみ出ています。

② 自ら意欲的に遊ぶ力

子どもたちは年間を通して、豊かな自然の中でじっくりと関わりました。多様な自然環境だからこそ、それぞれの興味に即して、探求し続けます。そして諸感覚を通し関わりながら自然を理解し、納得をしていきます。納得できた喜びは自信になります。自信をつけてさらに自然や友だちと意欲的に関わっていきます。このような力が豊かな自然環境の中で育まれます。



「探検に出発だ！ いくぞ おー！」

この絵は、男児（年長）が描きました。手を大きく伸ばし、身体も大きく描かれ自信に満ちあふれています。自ら積極的に源流探検を楽しもうという姿の表れです。

右側に描かれているのは隊長です。隊長よりも本人が大きく描かれています。隊長に負けない意気込みが感じられます。



「ぜったいに登るよ！」

この写真のように、難しい幹にも積極的に関わります。登れたという自信がさらなる意欲をかき立て、次々と難しい幹にチャレンジしていきます。このようなチャレンジする過程を経て、何事にも意欲をもって取り組み自信をつけていきます。

③ 自分のことは自分で行う力

1泊2日の集団宿泊の中で、基本的な生活（洗面、着替え等）は子ども自身で行うように運営しました。保護者への事前案内にて荷物を分けて持ってきていただくことなど「自分の荷物」を子どもたちに意識させました。歯みがきやトイレ、就寝まで「自分でできた」という自己有能感を育み自立への一歩を踏み出しました。回を重ねるごとに成長しました。



僕のズボン「表と裏どっち？」

子どもたちは苦勞しながら、時間がかかっても自分で自分のことをやり遂げました。□では「できないよ」、「靴下どこ行ったの」などといいながらも、仲間の着替えが進んでくると、黙々と衣類を身につけていました。できるできないに関係なく自分でやろうという気持ちを大切にしました。子どもの力を信じ待つことも大切な要因でした。

自分の布団は自分で敷くことを徹底しました。はじめは敷き布団などで遊ぶ姿が見られましたが、自分の寝る場所を確保する、お友だちの隣で寝たいなど、自分から積極的に布団を敷くようになりました。寝る場所を確保し、寝ることができるという必然性が自分のことは自分で行うという力を引き出しました。



僕「ここで寝るよ！」

4 社会力の向上（主張スキル、協調スキル、自己統制スキル）

近年は「小1プロブレム」の課題が表出しています。「この発生要因は、『家庭のしつけや児童の自己制御に関するもの』としています。」（文部科学省 2010）

幼児期にこそ「生きる力の基礎」を育む時期であり、安定した情緒の下で自己発揮すべきであると考えます。その中で社会的スキル（主張スキル、協調スキル、自己統制スキル）は重要な要素であると考えます。

よって、社会的スキルが、通年のキャンプを通してどのように推移するのか、またどのような保育士の援助が影響を与えるのか一考察を行います。

「幼児用社会的スキル尺度」は、高知大学教育学部の金山元春先生、金山佐喜子先生らが開発した尺度を使用しています。（金山 2011）※幼児用社会的スキル尺度（保護者評定版）高知大学教育学部 金山元春 金山佐喜子

調査の方法

本来、この評定は保育者が実施するものです。しかし、参加者の所属園にお願いをするのは難しいと判断し、子どもの保護者で実施しました。キャンプ後、次のキャンプまでの日常生活における子どもの様子について観察していただき評定尺度（5件法）にそれぞれ該当する所に回答してもらいました。調査用紙は、キャンプ受付時に回収しました。

調査結果

主張スキルの変容（得点範囲7～35）

「主張」とは、仲間入りをしたり、仲間を活動に誘ったり、自己の欲求を他者に伝えたりする行動。

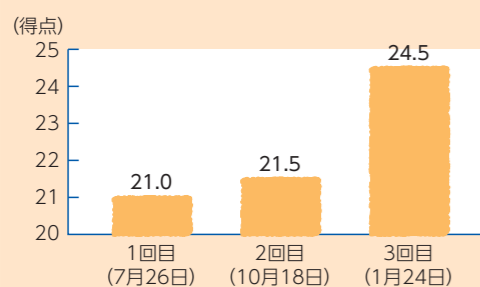


図1.「主張スキル」平均値の推移 (N=11)

図1では、3回目のポイントが1回目より3.5ポイント増加、2回目より3.0ポイント増加しました。これは、継続してキャンプを行うことで主張スキルが持続し向上したと考えられます。

キャンプでは、友だちとの交流や様々な活動を通して自分の意志を主張する姿が見られました。例えば森の遊びで、枝を集め家を作ろうとしています。一人では完成しないので「手伝って」、「一緒に運ぼう」など、活動の中で自然に声をかます。さらに、遊びが楽しいと「いれて」、「いいよ」などの言葉を交し、仲間と共に遊びが発展していきます。子ども主体の環境が整うからこそ、もっと「〇〇したい」など自己の欲求を積極的に表現することが出ていました。このように、多様な環境の場での遊びを通して仲間と関わりながら主張スキルは高まると考えられます。

そして、キャンプのような環境を継続して実施することで、主張スキルは日常生活（家庭や園）でも発揮され、高まりながら持続すると考えられます。

協調スキルの変容（得点範囲5～25）

「協調」とは、指示やルールに従うといった行動。

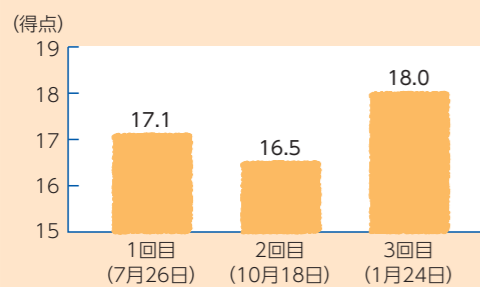


図2.「協調スキル」平均値の推移 (N=11)

図2では、3回目のポイントが1回目より0.9ポイント増加、2回目より1.5ポイント増加しました。これは、キャンプという活動場所の環境が大きく影響を与えていると考えます。

キャンプでは、生活環境とは異なるのでルールや保育者の指示を守ることが必要となります。例えば源流探検では、木や草が生い茂っており、水も冷たく、滝もあります。日常とは異なる環境であり、不安や葛藤があるでしょう。しかし活動するためには、この不安や葛藤を乗り越える必要があります。

この過程で、子どもたちは真剣に話をきき、指示やルールを守り、場の環境を受け入れていきます。場の持つ環境が、必然的に協調スキルを高めると考えられます。

自己統制スキルの変容（得点範囲4～20）

「自己統制」とは、葛藤場面では他者と折り合いをつける等の行動。

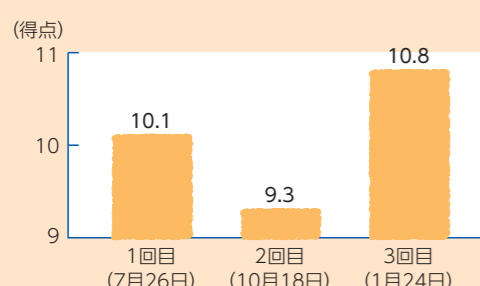


図3.「自己統制スキル」平均値の推移 (N=11)

図3では、3回目のポイントが1回目より0.7ポイント増加、2回目より1.5ポイント増加しました。これは、キャンプにおける集団生活や保育者の援助の在り方が影響を与えていると考えます。

キャンプでは集団生活をしているため、個人のわがままは通用しません。子どもたちは生活や活動の中で、衝突や葛藤を解決しながら、協調する力を育んでいきます。失敗しても何度も挑戦し、そこから小さな学びを得ていきます。

キャンプが楽しく友だちと共に活動するからこそ、互いに折り合いをつけながら、自己を統制していきます。そのタイミングを逃さず、保育者は「褒めてあげる」「認めてあげる」ことが、子どもにとって、さらなる自信となり自己統制スキルの向上につながると考えられます。

5 事業後における保護者のアンケートから（1月最終回のアンケートから。）

●事業全体を通してどうでしたか。



- ・四季を通して、たくさんの体験ができました。
- ・子どもたちが自ら挑戦できる活動が良かったです。
- ・親子で参加できるのが嬉しかったです。新しい視点で子どもを見ることができたので。

●この事業のプログラムや運営はいかがでしたか。



- ・現職の保育士の方がいるので安心できます。
- ・親の座談会でいろいろな話が聞けて良かったです。
- ・普段の園生活では体験できないことができました。
- ・子どもに合わせたゆとりあるプログラムで良かったです。

●保護者から見た子どもの変容について（自由記述）

- 1回目の春のキャンプでは、草むらでも「虫なんか興味ないよ」と言っていたのですが、森の探検が進むにつれて、「森の中には木の実があるのかな」と表情が変わりました。
- キャンプに参加するにつれて、「あと何回寝たらキャンプ」と楽しみにしている姿や、積極的に荷物のことを気にする様子がありました。
- 子どもの吸収力、順応性にはびっくりしました。子どもの成長を肌で感じました。
- キャンプでは親から離れて活動する場面があり、活動する毎に自信をつけてたくましくなっていく姿が見られて嬉しかったです。また、園生活でも自信を持って発言したり遊んだりしています。私自身も子どもを見直すきっかけになり、親子共々キャンプに感謝しています。
- キャンプの活動にはゆとりがあり、子どもの遊びをじっくりと見ることができました。また、子どもを待つということがいかに大切か改めて認識しました。
- 恥ずかしがり屋の息子が、少しずつ大きい声を出して友だちと楽しくしている姿は嬉しかったです。家では、手伝いを少しずつしてくれるようになってきました。自分でできることは自分で考え、探してお手伝いをしています。この力は子どもの中にずっと残るものだと思います。
- 参加している親の座談会を通して、子育ての悩みや不安なことについて話し合いが持たれたことで、心にゆとりが生まれました。悩みは同じなんだとほっとしました。ゆっくり子どもの力を信じて子育てしていこうと思います。

このように保護者は、子どもたちの姿から多くのことを学んでいます。

子どもの力を再認識したり、子育てにゆとりをもつこと、ありのままの子どもと向き合うことの大切さ、子どもの行為や発言を待つことなど様々な気づきがありました。この気づきがきっかけとなり、より良い親子関係を築いていって欲しいと思います。子どもにとって家族は最大の安全・安心の場所ですからね・・・

幼児キャンプから見えてきた“小1プロブレム”の解消に向けて

小学校に入学した1年生が、「授業中立ち歩く」「先生の話が聞くことができない」「教室を出て行ってしまう」などといった、いわゆる“小1プロブレム”。この原因としては、子どもが幼稚園や保育園からの大きな環境の変化に適應できない、家庭のしつけや学校教育に問題があるなど、様々な議論が交わされています。

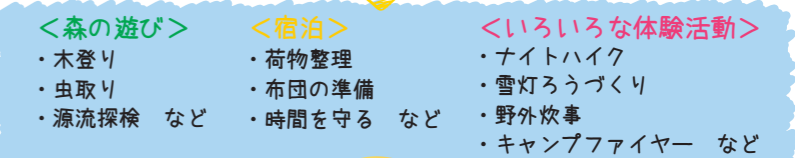
国立妙高青少年自然の家では、就学前の幼児期（4歳・5歳児）が“小1プロブレム”の解消に向けた重要な時期と捉え、スムーズな幼小の接続に必要な要素を活動に組み入れたキャンプの運営をしました。

その結果、多様な体験を通して、認められ褒められる経験や、自分で出来たという自信などが、“小1プロブレム”の解消の糸口になるのではないかと考えます。

スムーズな幼小接続に必要な要素

- 早寝・早起きをする。自分のことはじぶんでする。（基本的な生活習慣）
- 時間やルールを守る。時と場に応じた行動をとる。（規範意識）
- 相手の気持ちを考えて行動する。（他者理解）
- 自分で工夫して活動する。みんなで一つのことをやり遂げる。（満足感・充実感）

各要素を活動の中に取り入れる。



子どもたちは各活動の中で自分で気づき、考え、行動して、成功と失敗を繰り返しながら、スムーズな幼小の接続のための資質を養っていく。

スムーズな幼小の接続

協働運営



妙高市教育委員会と自然の家が連携を図り、企画から運営、評価まで熟議と協働を重ねました。人がつながり、思いが伝わり、両者の教育的リソースを十分に生かしたことは大変意義がありました。

妙高市教育委員会

保育士・幼稚園教諭の専門性
幼児理解・援助の在り方
発達段階の理解等

熟議と協働

キャンプ運営の質
職員の知識や技術
向上

自然の家

活動場所の熟知
プログラムデザイン
リスクマネジメント等



妙高市教育委員会
園指導主事 田中 洋子

■新採用職員3名の変容

最初は緊張と不安があり、役割分担も明確化されていなかったために戸惑いが多く、子どもへのかかわり方もぎこちなかったです。初めて出会う子どもたちと信頼関係を築くのは難しかったが、回数を重ねる毎にかかわり方や言葉かけがスムーズにできるようになっていきました。企画・運営を少しずつ任されることで、責任と意識が高まり、準備や役割分担など3名の保育者同士で綿密に打ち合わせをし、自主的に行動できるようになりました。

■新採用職員の力が園で生かされている点

自然の家で幼児キャンプに参加の子どもたちと一緒に貴重な体験したことで、保育においても自信をもって取り組めるようになりました。園の体験活動にも反映され、保育の活性化につながりました。研修においても意欲的に発言するようになりました。キャンプでの経験が、すぐに保育実践に表れるわけではありませんが、保育全般における視野の拡充が図られたと感じています。



■協働（連携する）することについて

①連携のメリット

自然の家職員の、子どもや保護者へのかかわり方や言葉かけなどを、学ぶよい機会となりました。企画・運営の面では互いの立場で意見交換することで視野が広がりました。自然の家での幼児キャンプを体験することで、自然の家の施設や活動面の把握や理解につながり、園で利用する時に役だっています。さまざまな人とかかわり、運営することでコミュニケーション力も高められました。

②妙高市教育委員会の対応

職員は、勤務としてキャンプ運営に携わっています。よって研修代（食事等の実費経費）や保険等の予算、代休など妙高市教育委員会に対応しています。



妙高市立斐太北保育園 齊藤 万理恵

幼児キャンプでは、日常の園生活では経験することの出来ない貴重な体験をさせて頂きました。企画・運営の面では、自分たちが子どもに体験してほしいことをどのように取り入れるかが難しく、時間の配分や様々な事を想定して企画しました。それでも自然を相手に想定外のことが起きることもありました。しっかりと反省し、何度も話し合い、打ち合わせを重ねたキャンプ。子どもたちの喜ぶ顔を見たときに、“やってよかった”と心から思うことが出来ました。また、自然の中で遊んでいる時の子どもたちのいきいきとした表情、キラキラと輝いた目を見て改めて自然体験の大切さを感じました。今回のキャンプで学んだことを日々の保育にも生かしていきたいと思えます。



妙高市立新井北幼稚園 小野 未絵

幼児期の自然体験の大切さに気付くことが出来ました。森の中では子どもたちは非日常体験をすることができ、その中で友達やスタッフとのコミュニケーションを取りながら、意欲をもってのびのびと遊ぶ姿が見られました。子どもたちの体だけでなく心も強くたくましくしてくれる自然の力を見ることが出来ました。また、不安を感じている子どもたちが少しずつスタッフを信頼し、話したり尋ねたりできる存在になれたこともとても嬉しく思いました。さらに企画運営面でも話し合いの中で意見させていただくことができ、大変貴重な経験となりました。この経験を普段の仕事の中でも十分生かせるように、これからも自身の自然体験を積み信頼される保育者となるよう努めていきたいです。



妙高市立しらかば幼稚園 丸山 愛

初めて会う子どもたちや保護者を対象とした慣れない環境の中で、事業に企画運営から携わりました。春のキャンプでは参加者の前で指揮を執る自信がなかったり、慣れない運営者側の役割に失敗したりして悩むこともありましたが、回数を重ねるごとに「もっとこうしたい、子どもたちのこんな姿が見たい」と思うようになり、話し合いで意見を出したり子どもや保護者の前に立って話す自信がついてきたりして、スタッフとして積極的に参加することが出来ました。見通しをもって保育することの大切さを踏まえながら、今後の保育に役立てていきたいと思えます。



森のおそび

豊富な活動
フィールドで
わくわく体験♪

概要

自然の家には、ナラの木広場、第2ナラの木広場、ありの巣広場、スバルの丘といった豊富な活動フィールドがあります。これらのフィールドはそれぞれ特徴が異なり、春から秋にかけて、草花探しや虫取り、木登りなどを楽しむことができます。

一つの場所でじっくり遊ぶこともできますが複数の場所を組み合わせ、移動しながら活動することもお勧めです。

また、移動の際にはオリエンテーリングコースを利用することができ、ただ移動するだけではなく子どもにとっては、ちょっとした探検をしているようなワクワク感を味わわせることができます。

子どもたちの様子

●スバルの丘では…



スバルの丘は、自然の家の中でも最も開けているフィールドです。地面のおうとつも他のフィールドに比べて少ないので、草花を探したり、虫を取ったりするだけでなく、地面に寝転がったり、鬼ごっこなどで思い切り走らせたりすることも可能です。

●移動も遊びになります。



次のフィールドへ移動する際も、オリエンテーリングコースを利用すると、ちょっとした探検気分を味わうことができます。ルートによっては森の中を流れる沢を渡る場所もあるので、ただ歩くだけではなく、子どもたちの興味・関心や意欲を持続させたり、次のフィールドへの期待感を大きくさせたりしながら移動することができます。

●木登りのほかにも遊びが広がります。



森の中には、折れた枝や木の実、植物の葉が豊富に落ちています。「木登りは少し苦手だな…」「もっといろいろな遊びがしたいな…」という子どもたちも、それらのものを使って自分で遊びを工夫していきます。

一人でじっくり遊ぶだけでなく、周りの子どもたちに声を掛けて一緒に遊ぼうとする様子も見られるようになります。

援助のポイント

①フィールドの下見をしましょう。

- ・それぞれのフィールドで子どもの動きを予想し、「何ができそうか?」「何をやりそうか」ということを事前に把握します。
- ・フィールドや移動ルートのウルシやはちの巣の有無などを確認します。
- ・子どもが登りそうな木(登れそうな木)の下の状況(凹凸や木の根など)を把握します。

②安全管理をしっかりと行いましょう。

- ・子どもが木に登るときは、木からの転落を考えて補助をします。
- ・ウルシやはちの巣、ヘビについて事前に指導します。(指導用資料があります)
- ・子どもの活動エリアや内容を予想し、引率の役割分担を明確にします。

③子どもの気付きや発見、遊びを認め、褒めてあげましょう。

- ・子どもの発見や喜び、楽しさ、感動を共感してあげます。
→子どもは、さらに興味・関心をもって自然とかわろうとします。

幼児の服装及び準備品

- 長袖・長ズボン
- 運動靴 … サングルはやめましょう。
- 帽子
- 水筒 … 必要に応じて
- トレー … 自然の家で貸出し可能
- ビニール袋 … 拾った木の实などを持ち帰ります。
- 着替え



メリット

- それぞれのフィールドの特徴に合った遊びを考えたり、より自分のレベルに合った遊びを工夫したりすることができます。
- いろいろな遊びを工夫することができるので、その中で仲間とのかかわりも増えていきます。
- 自然を相手に遊ぶ楽しさを味わうことで、自然とかわる意欲を高めることができます。

野外調理

親子で
楽しめます♪

概要

「食べること」は生活をしていくうえで欠かせないことであり、楽しみでもあります。調理に取り組むことで、毎日の食事がどのような手順で出来上がっているかを知ることができます。みんなと一緒に取り組むことで関心を持って食材に向かう様子もみられます。包丁や薪の火起こしなど普段危険とされているものを使用することも、子どもにとっては興味深い活動になるでしょう。

子どもたちが取り組んでいる姿からは、一人ひとりもつ“挑戦する意欲”を感じることができます。

子どもたちの様子

●取り組んだものが形になる喜びがあります。

子どもたちは自分で取り組んだお料理を前にして、形や色や味の感想を話しながら楽しい食事の時間になるでしょう。また、自分で調理することにより、苦手だった食材に挑戦するきっかけになります。

●自分と他児を認め合うきっかけになります。

「前にも切ったことがあるよ」「おうちでもお料理するの」と家庭での様子を話してくれます。また「〇〇ちゃんは上手いね」など、お互いに声をかける姿をみることがあります。自分ができることを認めてもらうことは嬉しいことです。そして子どもたちは自分が認められることで、他児のことも受け入れることにつながります。



援助のポイント

食事の時間でふりかえり

何に取り組んだのか、どんなふう頑張ったのかなど声掛けをし、チャレンジしたことに気づかせる時間を設けましょう。「〇〇を切ってくれてありがとう」などの言葉がけも、子どもたちの自信につながると同時に、大人が見守ってくれている安心感と喜びを感じます。



包丁の使い方

幼児にも「できる」ことはたくさんあります。それぞれが取り組めるよう、より良い方法を具体的に伝えるようにします。

- 包丁を使わずとも手でちぎれる食材 … キャベツ、こんにゃく など
- ピーラーで皮むきができる食材 … ジャガイモ、にんじん など
- 硬いものや、大きな食材は小さく（細く）分割してから取り組ませる … ジャガイモ、にんじん、玉ねぎ など
- 包丁に添える手は「猫の手にする」や「パーにして包丁の背を押す」など、分かりやすい言葉で話してあげるとよいです。

メニューの選択

お米を炊かなくてもよいメニューもあります（例：カートンドック、焼きそば、豚鍋うどん）。また親子一緒に取り組むときは、火の当番は大人が行うことで「こんなときには助けてくれる」と信頼を寄せることもあるでしょう。



安全管理

刃物を使います。調理用具は、始める前と終わってから数量を確認しましょう。包丁の置く場所を「お約束」で決めておくとういことです（例：まな板の右側）火を使います。子どもたちの動きに注意しましょう。



自然の家で用意してあるもの

- 野外炊事セット
- 幼児用包丁（刃先・角が丸いもの）
- ピーラー
- 食材は食堂で注文していただきます。



メリット

- 野外調理を通して、自分もできるという「自信」や「喜び」、役割をもって取り組む「責任」や「達成感」、そして食べ物に対する「感謝」の気持ちが生まれてきます。
- 子どもたちは、毎日の食事をおうちの方が作ってくれていることにも気づくでしょう。非日常での体験が、家庭での食事づくりにも興味をもったりお手伝いをしたり、「おうちでもやってみようかな」という思いを持ち帰ってもらうきっかけになります。

テント泊



概要

幼児にとって、眠るとき隣におうちの方がいてくれるということは何より安心な時間でしょう。いつかは一人で眠るときが来る、その挑戦を非日常のキャンプの中に組み込むことは、子どもたちにもよい動機付けになります。それがテントの中で寝袋を使ったものであれば、ワクワクする気持ちも湧き上がります。

自然の家ではテントは林の中に設置されており、暗くなったテントの中で普段気づくことのない気配を感じることも新鮮な体験です。朝の目覚めには鳥や虫たちの鳴き声に気づく場面もあり、より自然が身近なものになります。

テント泊を行った次の日から一人で眠ることができるわけではありませんが、この小さな挑戦で得た自信が、日々の生活の中での成長のきっかけになることでしょう。

子どもたちの様子

●自分と向き合い他児と関わる。

子どもたちはおうちの方と離れ、初めての場所で眠ることを不安に感じることでしょう。その不安を乗り越えるために、はしゃいでみせたり涙ぐんだり表情は様々ですが、それを乗り越えることは子ども自身の持つ力がグンと伸びる場面です。また、友だちと一緒にいることで勇気や心強さを感じ、お互いを思い合う気持ちもみられることでしょう。一晩を過ごし目覚めた表情からは、「できた！」という自信が感じられるはずです。



援助のポイント

就寝のとき … 不安を取り除く声かけが必要です。また、友だちが頑張る姿を見ることで勇気が出てくることもあります。ぜひ、子どもたちの気持ちに寄り添い見守ってください。

起床のとき … 一人で眠れた喜びを共に分かち合いましょ。一人ひとりに声をかけ頑張ったことを認めることで、子どもたちは達成感を感じるとともに自信をもつことができます。

安全管理

テントの出入りやトイレへの移動など暗い中では懐中電灯で足元を照らしましょう。

自然の家で用意してあるもの

- ・常設テント
- ・寝袋
- ・ランタン



幼児の服装及び準備品

- 長袖・長ズボンのパジャマ … 虫さされ予防のためです。
- 懐中電灯 … トイレまでの移動のために必要です。
- 着替え … 翌日の着替えをセットにして巾着袋に入れておくなど、幼児が一人で管理できるように工夫しましょう。



メリット

- 眠るまでの一連の準備（着替え・歯磨き・翌日の洋服の準備など）も自分自身で管理することで、日常生活につながっていきます。

夜の活動

ナイトハイク

概要

暗い道や森の中をあかり無しで歩く。小さな子どもたちにとっては、それだけで大冒険になります。夜の森を歩きながら月の明るさや地面の柔らかさを感じたり、昼間は聞こえなかった音が聞こえたりなど。子どもたちは、豊かな諸感覚で昼間とのいろいろな違いを感じたり、新たな発見をしたりしていきます。

また、友だちと一緒に歩くことで、近くに友だちがいることの安心感や心強さを味わうことができます。

子どもたちの様子

●出発前の話（安全面・森の様子）で興味・関心を引き出します。



出発前には注意事項と合わせて、子どもたちが夜の森に興味をもったり、歩くときのポイントを意識したりできるような話をします。

「動物がいるかもしれないよ」「いくつ音を見つける（聞く）ことができるかな」など、子どもの目や意識が自ずと自然に向くように話をしておくことが効果的です。

●所々で立ち止まりながら子どもの気づきや発見をみんなで共有します。



「月って、すごくあかるいね」「水の音はどこから聞こえてくるの?」「土の地面ってやわらかいんだね」「カエルの声が聞こえるね」などなど。普段の生活の中では見過ごしたり、聞き逃したりしてしまうような自然の様子やおもしろさを思い思いに語りだします。

夜の森は子どもたちの自然に対する興味・関心を広げていく場となります。

援助のポイント

- ①歩くコースの下見をしましょう。**
 - ・足元のでこぼこやぬかるみなどを確認します。
 - ・ケガなどの原因になりそうな植物を確認します。（自然の家の職員に聞いてください）
 - ・余裕があれば歩くコースにビニールテープなどで目印をつけます。（実施後は回収してください）
- ②子どもたちの興味を掻き立てる話をしましょう。（森を歩くときのポイント）**
 - ・「昼間とは違うことを探してみよう。」
 - ・「動物がいるかもしれないよ。」
 - ・「いろいろな音を聞いてこよう。」 など
- ③歩き方を確認しましょう。**
 - ・森の動物たちを驚かせないように静かに歩きます。
 - ・有害な植物もあるので、むやみにさわらないようにします。（さわるとかぶれてしまったり、とげがささったりする植物があります。）
 - ・隣の友だちと手をつなぎます。（2列で歩く場合）
- ④子どもたちが感じたり発見したりしたことを聞きましょう。（途中あるいは活動後）**
 - ・子どもたちが感じたり、発見したりしたことに共感しましょう。

幼児の服装及び準備品

- 長袖・長ズボン … 夏場でも暗い森の中に入るの、薄手の長袖・長ズボンが望ましいです。
- 運動靴 … 夏場のサンダルはやめましょう。
- 帽子
- 懐中電灯2～3台 … 引率の先生用



メリット

- 子どもたちが自然に興味をもつ、よいきっかけとなります。
- 暗い道を友だちと歩くことで味わった安心感が、その後のかわりの中で良い影響を与えます。

キャンプファイヤー

概要

キャンプファイヤーはいろいろなねらいに合わせて実施することができます。また、内容を工夫することによって短い時間で実施することができるので、幼児対象のキャンプでもお勤めのプログラムです。

指導者の“思い”や子どもたちの実態から内容を検討し、楽しい時間を過ごしてみませんか？

子どもたちの様子



●一体感を味わう

普段目にすることのない大きな炎の前に、子どもたちは大喜びです。一つの炎を囲んでゲームをしたり、歌をうたったりする中で、自然と子どもたちに一体感が生まれます。生まれた一体感は、その後の子どもたち同士のかかわりに良い影響を与えてくれます。

中には、炎に恐怖心を抱く子どももいるので、そのような子には十分な配慮が必要です。

援助のポイント

①現地の下見を行いましょう。

・場所の確認や物品の確認を行います。 ※場所や用具については事前打合せ等で自然の家職員が相談に乗らせていただきます。

②内容を検討しましょう。

- ・焚き火を囲んでみんなでゲームやダンスをしたり、歌を歌ったりなど事前に子どもたちの実態や希望に合った内容を検討します。(いつも園で行っているダンスや歌が準備や練習が必要ないので最適です。)
- ・セレモニー的な内容は実態によって省いたり、引率者が行ったりします。(点火を子どもに行わせる時は、十分な配慮が必要です。)

③安全管理をしっかりと行いましょう。

- ・キャンプファイヤーでは、普段子どもたちが見たことのない大きな炎が上がります。引率者は場の雰囲気や子どもたちの心の動きをしっかりとコントロールしましょう。
- ・火の粉が飛び散りますので、あまり近づかないようにしましょう。
- ・複数の目で子どもたちを把握しましょう。

④後片付けをしっかりと行いましょう。

- ・教育的見地から、子どもたちに行わせる場合は、できることとできないことを判断し、事前に計画を立てましょう。

幼児の服装及び準備品

- 長袖・長ズボン … 薄でのもの 虫さされ予防のためです。
- 帽子
- 懐中電灯



団体で用意していただく物

- トーチの先端に付ける布
- チャッカマン … マッチやライターでも可
- 新聞紙 … 焚き付け用

自然の家で貸出できる物

- ・トーチ (1団体5本まで)
 - ・ワイヤレスアンブ
 - ・CDラジカセ
 - ・バケツ
 - ・延長コード など
- ※その他はご相談ください

自然の家で購入できるもの

- ・まき
- ・灯油 (焚き付け用)

メリット

- 友だち同士の親睦を図ったり、キャンプへの期待や意欲を高めたりすることができます。

スノーキャンドル

概要

スノーキャンドルは、道具がなくても簡単に作るすることができます。

子どもたちは砂遊びをする感覚で次々と灯ろうを作ることができます。また、活動の時間に応じて、その形を工夫して作ることができます。

銀世界を照らすやわらかな灯が作りだす幻想的な世界は、小さな子どもたちにも感動を与えること間違いなしの美しさです。

子どもたちの様子



●造形する喜び

砂遊びで山を作って、そこにトンネルを掘る感覚でスノーキャンドルを作っていきます。時間がある時には、形を工夫させたり、全体でテーマをもったりして作ることもお勤めです。

柔らかい雪の上に寝転がって人型を作り、そこにキャンドルをともしてもおもしろい活動になります。



●やわらかな灯りに感動

山にトンネルを掘っただけの簡単なスノーキャンドルでも、子どもたちは自分たちが作った光から放たれるやわらかさや、あたたかさに感動します。

時間があつたり、気象条件がよかつたりすれば、幻想的な光を見た感想などを伝え合う活動もよいと思います。

援助のポイント

①灯ろうの位置 (レイアウト) を事前に考えたり、子どもたちが活動しやすい場所を設定したりしましょう。

- ・活動方法や場所については、活動のねらいや時間等に応じて自然の家の職員が相談に乗らせていただきます。

②安全管理をしっかりと行いましょう。

- ・内容によっては、スコップや移植ごてなどの道具を使います。道具の正しい使い方を事前に伝えます。
- ・ろうそくへの点灯は指導者が行います。

③後片付けを忘れずに行いましょう。

- ・活動終了後は、ろうそくと紙コップを回収します。
- ・“ゴミを残さない”ということから「環境を守る」という意識を育てましょう。

幼児の服装及び準備品

- スキーウエア等の防寒具
- スキー手袋
- 長靴
- 帽子 … ニット等の冬用
- ろうそく … 100円ショップでも売っているアロマキャンドルが良いです
- 白の紙コップ … 中にろうそくを入れると風よけになります
- チャッカマン … ライターでも可
- (バケツ) スコップ 移植ごて)



メリット

- 雪国の夜を感動的に味わうことができます。
- 内容によっては自分の思いを表現したり、友だちと協力したりして創作活動となります。

妙高保育園の自然体験活動

妙高市立妙高保育園は3歳児～5歳児までの園児が、年間を通して9回利用しました。各年次の発達段階に即した体験活動が展開されていました。その実践について紹介します。記載内容については園の先生方が作成しました。

1 年間を通した自然体験活動のねらい

豊かな自然の中で四季折々の自然体験を通して、保育者も子どもと共に夢中になって活動し、一人一人の発見や気づきに共感し、じっくり考えたり試したりすることを共有します。そして、全身を使って自然のおもしろさや不思議さ、美しさを感じ、それを表現できる感性を育てます。

2 主な活動プログラム

春 4月25日(木)

対象年次 5歳児
活動プログラム

雪解け、草木の芽生え、春の訪れを感じる。

子どもの姿

残雪の傾斜を「登れない」「手が汚れる」「冷たい」と手を使わないで登ろうとしていた。雪の上を歩き進むと落ちていた木の枝を剣やピストルに見立てて遊ぶ。その後、木の枝を雪の中に埋めた。それを見ていた子が「おおきくなるといいね」とつぶやいた。



夏 7月25日(木)

対象年次 4・5歳児
活動プログラム

源流探検

子どもの姿

ズックをはいたまま足を一歩川に踏み入れた時「冷たい」と言いながらもどんどん進む子どもたち、集団生活では言葉が少ない子ども川の中を歩きながら友達と話す言葉が多く聞かれた。昼食時、友達と「たのしかったね」と話し、興奮気味だった。



秋 9月18日(水)

対象年次 3歳児
活動プログラム

森の探検

子どもの姿

森の中で木の根や枝を揺らす、匂いをかぐ、木を叩くなど見るものすべてに興味をもち手で触れていた。「木の根はどこに続いているの?」「こっちへ行ってみよう」と想像を膨らませて森の中を探検していた。



冬 11月20日(水)

対象年次 4・5歳児
活動プログラム

初冬の森の探検

子どもの姿

想定外の初雪、地図を見ても目印や道はない、前に進んだ友達の足跡を見つけて進むチーム。「静かにして」と周りの音を頼りに進むチーム。みんなで考えを出し合いながらゴールを目指した。
4歳児も地図を持てる喜びとワクワク感があつた。



3 年間を通した自然体験活動の取組の成果

(1) 自然の家における子どもたちの姿

初回の森の探検は嬉しさと開放感で森の中での発見、気づきを保育者に「見て見て」と感動を伝えていました。友達について歩くのがやっとの子も2回目には木の幹をじっと見ている、4歳児に臭いをかがせようとしていたり、友達の登っている木は自分が登れないと思い、自分が登れそうな木を探して登ったりする姿が見られました。関温泉スキー場のハイキングでは先を急ぐあまり坂道を走り出し元気いっぱいでした。しかし、「疲れた、自転車乗りよりきつい」と今まで体験した辛いことと比較する子もいました。回数を積み重ねチーム活動になると自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け入れたりして、協力し合い目的を成し遂げる喜びにつながりました。一人一人が自分の行動に自信をもち、たくましくなりました。

(2) 日常生活につながっている力

園庭の脇を流れる小川に抵抗なく入り、生き物を探したり、捕まえたりするのにペットボトルを工夫して小川に仕掛けるなど友達とアイディアを出し合って毎日の遊びにつながりができてきました。また、自分でやってみようと思ったことに迷わず挑戦し、試す意欲が感じられるようになりました。

(3) 保護者の意識変化

衣服の汚れや外履きの汚れ物を持ち帰って洗うことに協力的でした。家庭では自然に恵まれていても子どもと一緒に自然の中で遊ぶ機会が少ないので、自然体験活動の理解が深まりました。回を重ねるごとにたくましさを感じると喜ばれました。

(4) 保育士の意識変化

安全面を優先した言葉かけや、やってみたい子どもの気持ちに余裕をもって見守ることができず、子どもと一緒に楽しめないところがありました。活動後の振り返りで次につながるよう努めました。

活動では、子ども同士の助け合いや挑戦しようとする姿を見守り、子どもと一緒に自然遊びを行い、楽しいと感じるようになってきました。

4 今後の課題

- 自然の家での自然体験活動を通して得た体験を園庭や田んぼの泥んこ遊び、園庭脇の小川、畑を一体化した中で子どもたちが好きな場所で主体的に夢中になって遊べる環境を工夫する必要があると考えます。
- 保育者自身が自然に触れる喜び、感動を心から感じ、それを子どもたちと一緒に共感し、身近な自然遊びを伝えていこうとする意識を高める必要があると考えます。



ときわ保育園の自然体験活動

社会福祉法人ときわ保育園は3歳児～5歳児までの園児が、年間を通して7回利用しました。親子での活動も行われ、積極的に親を巻き込んで自然体験活動に取り組んでいます。その実践について紹介します。記載内容については園の先生方が作成しました。

1 年間を通した自然体験活動のねらい

- 四季の自然の中で環境に応じて自分で遊びを考えて遊びます。
- いろいろな自然物（昆虫、植物）などに自ら積極的に関わります。
- 子どもの姿の変容から、自然体験活動における保護者への理解を深めます。
- 系統づけてきた年間を通しての活動をより深めて考察します。



2 主な活動プログラム

春 6月26日（水）

対象年次 5歳児
活動プログラム

昆虫探し、森での木登り、森の探検

子どもの姿

小雨の降る悪天候ではあったが、みな昆虫（バッタ）を見つけたく懸命に探す姿が見られた。バッタを見つけて触れないA児がいた。しかし「できない」と言いながらも、友だちがバッタを捕まえる姿を見て、怖いながらも自分の手で捕まえることができた。嬉しそうに「捕まえたよ」と友だちや保育士に声がけをしていた。



夏 8月9日（金）

対象年次 5歳児
活動プログラム

源流探検

子どもの姿

今年度、2回目の源流探検だったため、源流の環境にも慣れて躊躇することなく川の中に入り、上流を目指した。岩や小さな滝を、自分で考え身体全体を使って乗り越え、足場を安全に確保していた。友だちと「ここ登るといいよ」、「足をここにのせるんだよ」など互いに声を掛け合い励まし合いながら進む姿が見られた。



秋 9月18日（水）

対象年次 3歳児、4歳児、
5歳児とその保護者

活動プログラム

森の探検、木登り、木の実拾い、昆虫探し

子どもの姿

木登り、木の実、きのこ拾い、昆虫探し、木の枝を使って遊ぶなど、各年齢で自分の興味のあることや、自然物を探し夢中になって遊ぶ姿が見られた。楽しいことやできるようになったこと、発見した喜びを嬉しそうに保護者や、保育士に話していた。



冬 1月31日（金）

対象年次 4・5歳児
活動プログラム

深雪探検

子どもの姿

園での雪遊びで、数回雪だるま作りをしていた。深雪の中を進み広場に出ると、柔らかくたくさんある雪を丸めだして雪だるま作りが始まった。「大きいを作ろうよ」など、友だちと一緒に雪だるまを作り、一人では転がせないの「手伝って」、「いいよ」など会話を交わしながら協力して雪玉を作る姿が見られた。



3 年間を通した自然体験活動の取組の成果



(1) 自然の家における子どもたちの姿

3・4歳児は、年長児のまねをしながら初めての場所、活動にいろいろな友達の刺激を受けながら興味を持ち、遊びを自分の中に取り入れたりして、お互いにアイデアを出し合いながら遊びを展開させていました。

年長児は自然物の発見や気づきが多くなり、発見した物を見せ合ったり、教えたり、また、年下の友達が沢のぼり、木のぼりなどでうまくできない時はやり方を教えたり、助けてやるなど協力する仲間意識が深まりました。

(2) 日常の園生活につながっている力

自分の力でやり遂げる達成感の経験から、何事にも粘り強く取り組む力や意欲的に取り組む力が身につきました。いろいろな場所や活動の中で体を巧みに使う力が備わってきて、ケガをする子どもがほとんどいなくなり、また、「疲れた」「暑い」「寒い」など弱音を吐く子もいなくなりました。

絵画活動の自然体験活動の絵は、実際に沢山経験している為か、生き生きと楽しんだ絵を描いていました。また、草や土なども意識して描く子どもが多くなりました。

(3) 保護者の意識変化

年に1回行って来た親子園外活動では、活動と共に保護者講演会を行い、子どもたちの活動を理解したり、自然体験活動に協力的になりました。また、家庭でも子どもにも体験したことを聞いたり、出来たことをほめたりするようになってきました。積極的にキャンプのイベントに参加したり、親子で近隣の公園等に出かける家族が増えました。

(4) 保育士の意識変化

自然体験活動後、振り返りを行って2年目になります。活動後の振り返りを行うことで子どもの変容を全体で共有し、多角的な視点から深い考察ができるようになってきました。

また、子どもたちと共に多様な活動を通して自然体験活動の理解が深まりました。

4 今後の課題

自然の家での自然体験活動も9年間実施して来ましたが、その為、子どもたち、保育士、保護者もいろいろな面で充実して来ていると思います。しかし園外保育での活動が、日常の保育園での活動につながりを持ち、発展するような園庭での環境構成が必要であると考えます。

さらに、保護者の理解をより深めるために年間を通して参画してもらう必要もあると感じます。



おわりに

子どもの自立と保護者の学び

「かんばんーい！いただきます。」元気な声が雪原に響きました。雪のテーブルとおいしい飲み物、そしておやつチョコレート。チョコレートを均等に分けてくれる子、飲み物を注いでくれる子、順番を待つ子、となりの友達と話をする子、木の枝でケーキを作ってごっこ遊びをする子。子どもたちは、ここでミニ社会体験をして小さな社会集団を形成しています。雪や森、川、山といった大自然と自然の家での生活は、子どもたちに素晴らしい学習の機会を提供してくれます。就寝時には、保護者から離れて子どもたちだけの挑戦や仲間とのふれあい体験は、貴重な学びの場です。

そんな子どもの姿を、保護者の皆さんは温かい視線で見守っています。保護者の目に映る我が子や孫、仲間との活動を見て心配したり頼もしく思ったり。その保護者の温かい視線と励ましの言葉や褒め言葉が、子どもたちの自信につながります。また、自分の力で活動している子どもたちへのかかわり方も、大人の学びの場でもありました。

そんな、幼児期における自然体験活動を本書にまとめました。皆様のご批評を賜りたくお願い申し上げます。最後になりましたが、この取組を支えていただきました妙高市教育委員会教育長の濁川明男様をはじめ、田中園指導主事、3名の先生方に感謝申し上げます。

国立妙高青少年自然の家 所長 伊野 亘

幼児キャンプの中で保育者がさまざまな体験をすることで貴重な財産になり、日々子どもたちとのかかわりの中で生かされています。自然体験が少ない子どもたちにとって保育者は人的環境として大きな役割もっています。そういう意味でも保育者自身が自然体験することは大きな価値があり、必要なことです。

幼児キャンプでは自然の家の職員やボランティアからの刺激も多く、企画・運営・評価まで携わることは協働性と柔軟な力が培われました。その力が今後の保育に生かされ、さらに妙高市全体の園にも浸透して欲しいと切に願っています。

妙高市教育委員会 園指導主事 田中 洋子



この写真は、キャンプ最終回の一コマです。1年間が一番思い出に残っていることを絵と言葉で表現しました。

画用紙いっぱい表現しています。躍動感にあふれ、自信に満ちあふれています。それは、がんばった自分に自信を持っていることと、感動できる豊かな感性があるからです。

それを、自分の言葉で一生涯に伝えました。一言がとても貴重な言葉でした。自分の心から出た“ほんもの”だからです。誰のものでもありません。自分のものです。

この“ほんもの”をずっと大切にしたいと思っています。ご家族の温かい愛情のもと、大きく羽ばたいてくださいね。探検隊のみんな！

事業担当 室井 修一

協働運営者及び報告書執筆者

- 妙高市教育委員会園指導主事 田中洋子 (げばちゃん)
- 妙高市立斐太北保育園 齊藤万理恵 (まりお)
- 妙高市立新井北幼稚園 小野未絵 (みみりん)
- 妙高市立しらかば幼稚園 丸山愛 (まるちゃん)
- 妙高市立妙高保育園 職員の皆さま
- 社会福祉法人恵信会 ときわ保育園 職員の皆さま

国立妙高青少年自然の家

- 企画指導専門職 室井修一 (たいちょう)
- 事業推進係主任 中川知己 (じゃいあん)
- 事業推進係 蟹江真耶 (かにかに)

平成25年度国立妙高青少年自然の家職員一同

- 所長 伊野 亘
- 次長 國府 修治
- 主任企画指導専門職 高瀬 裕
- 企画指導専門職 小野 俊巳・水澤 勝宏
近藤 和久・室井 修一
- 事業推進係長 橋本 彰
- 事業推進専門職 岸本 政和
- 事業推進係主任 中川 知己・友松 由実
- 事業推進係 望月 こそえ・飯吉 陽子
蟹江 真耶・松崎 和輝
- 総務係長 島田 一馬
- 総務係主任 高松 宏幸
- 総務係 関 博志
- 管理係長 安田 大信
- 管理係 飯吉香代子・清水 綾
豊岡 佳苗



子どもたちに豊かな自然体験活動を! ～幼児期における自然体験活動の取組～

独立行政法人国立青少年教育振興機構
 国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市関山6323-2
TEL:0255-82-4321 URL:<http://myoko.niye.go.jp/>

国立妙高

検索 

平成26年3月